



自由闊達な研究人生を謳歌しよう

佃 達哉 Tatsuya TSUKUDA

ナノ学会会長, 東京大学理学系教授



歳を重ねるごとに、学生のエッセイや若手研究者の申請書などを読ませていただく機会が多くなった。伝えたい内容が論理的で明快な文章と綺麗な図を使ってわかりやすくアピールされている書き物が多いことに感心する。一方で、本当に書きたいことを書いているのかな、というモヤっとした印象を持つこともある。特に気になるのは、読み手がどう受け取るかを付度しすぎるあまり、流行りのキーワードと一緒に考え方や価値観もほかから借りているように思える場合である。例えば、社会的な要請に対して答えを出すことが研究活動の重要な使命の1つであることは多くの人が共有する価値観だが、これに無理をして擦り寄せてしまうと、書き手の個性や情熱が読み手に正しく伝わってこない場合もある。同じような状況は、企業の就職活動でも見られるのではないかと推察する。これまでの諸先輩の輝かしい実績を通して見えてくるのは、産学を問わず日本の化学研究の強みは、解くべき課題を自ら発掘し、不断の努力と独創的な取り組みでこれを克服できる「個の力」にあるということだ。実際に、私が関係しているナノサイエンス・ナノテク関連の研究分野では、米国が2000年に国家重点課題としてトップダウン的に推進することを打ち出したが、日本ではすでにボトムアップ的な取り組みで先導的な成果があがっていたのである。

日本の研究力の低下が指摘され、様々な若手支援策が打ち出されている。例えば、独立研究者が腰を据えて挑戦することを後押しすべく、科学技術振興機構は昨年度から「創発的研究支援事業」を開始した。生活を含めた研究環境の改善に向けた努力を今後も継続することは重要であるが、それだけで研究力が向上するとは考えにくい。我が国の研究の原動力は、研究を志す若い皆さんであり、研究力向上のためには個性を発揮していただくことが欠かせないと思う。どんな時代・環境であれ、独創的な研究は、自分にしかできないことを考え抜いたところに芽吹き、達成後の喜びを信じて全身全霊打ち込むことで花開くのではないだろうか。研究者を志す若い皆さんには、一度しかないご自身の研究人生をリスク込みで慈しみ、悔いを残さないように自由闊達に謳歌していただきたい。不細工でも、癖があっても構わない。自分を信じて、自分のフォームでフルスイングしていただくことを願ってやまない。

© 2021 The Chemical Society of Japan